

高校中退者のライフスタイル

～卒業生との比較を通して～

橋 本 明

I. はじめに

全国の高校中退者が年間12万人を越える時代になり¹⁾、中退者に関する新聞・テレビでの報道も目立ってきている。中退者のなかには“無職少年”と化し、学校や職場には所属せず、仲間を求めて“群れ”化するものもいる。あるいは、犯罪に荷担することでマスコミを賑わすこともある。もっとも、このような中退者はごく例外であり、多くは乏しい社会関係の中で、基幹労働力としてあてにもされず、しかも福祉の対象にもなりにくいといった“社会的弱者”である²⁾。

しかしこれまで、中退理由などの分析はなされるものの、中退後の中退者の実状についてはほとんど語られることはなかった。本論では中退者との面接を通して、中退後の生活再建過程を追い、同時に中退者の意識を問い、中退者の社会への適応などについて考察した。

II. 対象と方法

本論文の対象は、S県内にある公立の商業科高校（以下H高校と呼ぶ）に昭和52年から57年の間に入学し、途中で退学した男子生徒すべてである。対象の抽出方法は、H高校の在校生名簿および卒業生名簿を照合し、名前が消失している男子生徒すべてについて、本人宅に電話あるいは卒業生からの情報などにより、中退か転学かを確認した。その結果、この期間の入学者のうち66名が中退者であることが明らかになった。

これらの中退者には調査の趣旨を伝え、面接を依頼した。そのうち、実際に面接ができた者は22名であった。残り44名の面接ができなかった主な理由は、「仕事が忙しい」(15名)、「転居先不明または本人不在」(11名)、「拒否」(5名)などである。面接では主として、中退に至るまでの状況、中退後現在に至るまでの経緯、中退した当時と現在とを比較したときの心理的・社会的変化、そして家族構成などについて尋ねた。面接は1時間程度おこなったが、時刻・場所の選定に当たっては、できる限り対象者の希望に沿う形で実施したため、必ずしも面接にはふさわしくない状況下の場合もあった。さらに、1回の面接では十分に聞き取れなかった部分を補う意味で、2回目の面接を行うことができた者が4名である。

また、対象者66名の中で直接本人と話すことができなかった場合は、中退者本人の友人(やはり中退者であることが多い)や当時の担任の教師などの情報から、中退に至るまでの状況を把握した。

次に、中退者像をより明確にするために、一連の中退者との面接をほぼ終えてから、H高校の男子卒業生25名についても面接を実施した。この25名は昭和52年から57年の間に入学した者で、卒業生名簿から無作為に選んだ。面接方法・内容は中退者のものに準じ、中退者において「中退時」であったものを、卒業生では「卒業時」に置き換えるなどした。

以上の一連の作業は昭和60年3月中旬より同年8月末日にかけて行われた。

Ⅲ. 結果

1. 全中退者66名の概要(表1)

昭和52年から57年にかけてH高校に入学した男子生徒の総数は1,111名で、そのうち中退者は66名、5.9%を占める。この当時の全国の高校における平均の中退率は1~2%で推移しており^{3)・4)}、H高校の男子生徒に限れば全国的にみてやや高い中退率を示しているといえる。

1) 中退に至るまでの状況

まず、高校在籍中に窃盗やバイクによる集団暴走行為、暴行などの問題行為

表1 H高校における男子中退者の動向

入学年度	男子入学者数 (a)	3年後の男子 卒業生数(b)	(a) - (b)	内 訳
昭和52年	201	191	10	中退 8, 転学 2
昭和53年	201	180	21	中退21, 転学 0
昭和54年	197	190	7	中退 6, 転学 1
昭和55年	197	185	12	中退 9, 転学 3
昭和56年	165	153	12	中退12, 転学 0
昭和57年	150	140	10	中退10, 転学 0
計	1111	1039	72	中退66, 転学 6

の有無で分けた場合、問題行為があった者が37名、なかった者が26名、不明が3名であった。さらに、問題行為があった者のうち、中退の直接的理由として、問題行為そのものがその理由である者が19名、学業不振・学校不適応による者が17名などとなっている。一方、問題行為がなかった者の中退の直接的理由では、学業不振・学校不適応が16名、社会に出て働きたいという者が6名と続く。

2) 現在の状況

面接時に、就労（就学）している者が56名（通信制高校在籍2名、調理師学校在籍1名を含む）、無職が6名、不明が4名であった。

就労している者の具体的な職種は、飲食店々員（5名）、トラック運転手（5名）、自動車・オートバイ製造業（4名）、建築業（4名）などが主なものである。

2. 面接した中退者22名について（表2参照）

1) 中退後、現在に至るまでの経緯

面接した22名の中退者が中退後にどのような経過をたどって現在に至っているのかを見る場合、厳密にはこれらの中退者間で最高5才の年齢差があることを考慮しなくてはなからうが、中退後の経過期間の違いに関わらず、その経過は大きく2つのタイプに分けられる。

一つは中退後、頻繁に職を替えた時期があったタイプ（タイプA）、もう一

表2 事例一覧(面接した中退者22名)

No.	年齢	就労状況	中退時期	中退に至るまでの状況	中退後の経緯
1	19	織物関係	高2	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈安〉
2	19	印刷加工	高2	社会に出て働きたい	〈安〉
3	19	通信制高校在学	高3	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈安〉
4	19	調理師学校在学	高3	(資格を取って) 社会に出て働きたい	〈安〉
5	20	学習教材販売	高2	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈転〉
6	20	板 前	高2	〈問題〉↓ 暴力行為	〈安〉
7	20	寿司チェーン店 店 長	高1	〈問題〉↓ 暴力行為	〈安〉
8	20	オートバイ 組み立て工場	高1	〈問題〉↓ 暴力行為	〈安〉
9	21	室内装飾	高3	〈問題〉↓ 長期無断外泊	〈転〉
10	21	酒店店員	高3	〈問題〉↓ 暴走族, 無免許運転	〈安〉
11	21	金属などの 研磨工場	高2	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈転〉
12	21	トラック運転手	高2	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈転〉
13	21	土木作業	高3	〈問題〉↓ 度重なる校則違反	〈転〉
14	22	トラック運転手	高1	社会に出て働きたい	〈安〉
15	23	鉄工場	高3	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈転〉
16	23	塗 装 業	高3	〈問題〉↓ シンナー遊び	〈転〉
17	23	文具販売	高2	学業不振/学校不適應	〈転〉
18	23	トラック運転手	高1	学業不振/学校不適應	〈転〉
19	23	タイヤ卸売業	高2	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈安〉
20	23	自動車整備士	高1	学業不振/学校不適應	〈安〉
21	24	ペンキ卸売業	高2	〈問題〉 学業不振/学校不適應	〈転〉
22	24	空調整備	高2	〈問題〉↓ 度重なる校則違反	〈転〉

表の見方

〈問題〉は高校在学中に問題行為があったことを示す

〈問題〉↓は矢印以下の問題行為が中退の直接的理由となったことを示す

〈転〉は中退後、頻繁に職を替えた時期があったタイプ

〈安〉は中退後、比較的安定して仕事を継続しているタイプ

つは中退直後から比較的安定して仕事をしてきたというタイプ（タイプB）である。なお、高校を中退してから面接した日までの時期が1年未満の者が2名あったが、ともに就学中であり安定して学業と取り組んでいる印象を受けたので、タイプBに含めた。

具体的な事例を挙げると以下のようなになる。

事例 No. 21（タイプA）

24歳、ペンキ卸売業、学業不振により高校2年で中退

高校中退後、2,3カ月ぶらぶらした後、N市に行く。そこで、仕出し屋に勤めたが、その主人が気に入らず、すぐにやめた。次に建設会社の下請け作業をやったが、仕事がきつく、現場監督に言われた言葉に憤慨して、2カ月足らずでやめた。その後、実家に戻り、1,2カ月ぶらぶらし、ハンバーガー店や、職安で見つけた仕事をしてきたが、どれも長続きせず、働いてはまたしばらく遊んでいることの繰り返しだった。

事例 No. 7（タイプB）

20歳、寿司チェーン店々長、暴力行為により高校1年で中退

高校中退して2日後に父親の知人の紹介で、調理師見習いということでレストランに勤めた。そこで3年くらい働いたが、勤務時間が不規則で給料もよくないので、兄の紹介で現在の店に就職した。

これらの2例は典型的なものであるが、2つのタイプの差は意外に明瞭であり、他の20例についてもA、Bのタイプに分けるのは容易である。

その結果、22名の中でタイプA、タイプBがそれぞれ11名ずつとなった。さらに高校在籍中に問題行為があったか否かと、このタイプとの関係を見た（表3）。ここでわかることは、在籍中の問題行為と中退後現在に至るまでの経緯との間には一貫した特徴は見られない。もっともタイプBの中には、就学中の者以外に、中退後から家業の手伝いをしてきたといった「職を転々とする」という性格をもたない例も含まれている。また中退後就職する際に、事例7のよ

うに家族の援助があった者や、再び別の高校へ入りなおして卒業した者などは、安定して仕事を続けている。

しかし、いずれにしても中退後1, 2年を経過すれば「職を転々とする」者はほとんどいなくなっているようである。

表3 面接者22名の高校在学中の問題行為と現在に至るまでの経緯

	就労を中心にした中退から 現在に至るまでの経緯		計
	職を転々	比較的安定	
高校在学中問題 行為があった者	9	7	16
高校在学中問題 行為がなかった 者	2	4	6
計	11	11	22

2) 中退時から現在までの心理的変遷

a. 中退時の意識

中退者の多くは、中退した頃の自分の心理状態について、「本来はおっとりとした性格だが、高校の時はひどく短気だった」、「当時の自分は鉄砲玉みたいなものだった」、「神経がピリピリしていた」などと述べており、衝動性や高い緊張感があったと推察される。そのため、自ら中退していった者は衝動的に深刻に悩まずにやめていったケースが少なくない。

事例 No. 17

23歳，文具販売業，学業不振・学校不適應により高校2年で中退

提出物のことで、些細なことから教師と口論となり、「やめる」と言った手前、後に引けなくなった。友人にもやめると言ったことと、教師にもそれほど引き留められなかったことで、中退した。当時は粹がって、見栄でつぶっていたのも中退のおもな原因だと思う。

このように中退後のことを考える余裕は見られず、ある中退者の言葉を借りれば「自分をやめる方に追い込んでしまった」という心理状態に近いのではないだろうか。さらに、問題行為が直接の中退原因となった者の中には、スクールバスの中でシンナーを吸っていた例や、禁止されているバイクに乗って校門の前で起こした事故により退学になった例など、常識的な判断力に欠けていたと言わざるを得ないものもある。これらも、安易に中退へと自ら「追い込んでしまった」例と言えよう。

b. 中退直後の意識

次に、中退者が中退した直後にはどのような気持ちであったかについて述べてみたい。

多くの中退者は、「中退してすぐは寂しかった」、「(退学させられて) 最初は腹が立ったし、落ち込んだ」、「中退後3カ月くらいは、いやな気分だった」など、何らかの心理的ダメージがあったことを述べているが、「運が悪いと思ってあきらめた」、「一時的には落ち込んだが、仕方がないと思った」と、中退後すぐに気持ちの整理をつけていたとする者が大半である。

他方、中退してむしろ「楽しかった、解放感があった」と言う者や、調理師学校に進んだ者は、中退したことへの未練よりも、入学する学校への期待感の方が大きく、心理的なダメージはなかったとしている。

このように中退直後の退学の受け止め方は様々で、中退の状況や中退後の進路などの複数の要素が関わっていると考えられる。

c. 中退後から現在までの意識

高校在籍時の中退者の衝動性・緊張感については既に述べたが、現在の状況については、「今はのんびりしてきた」、「短気だったが、このごろだいぶ根気強くなった」、「以前と比べてかなりおとなしくなってしまった」など、気分的に落ち着いてきたと意識している者がほとんどであった。確かにこのような内面的変化も一つの特徴であるが、以下に述べる中退者自身が抱く“中退者意識”も重要である。

時間が経つにつれて、中退者にとっては高卒という資格や高卒者に対して複雑な感情を抱くようになってくるようである。実際、面接した中退者の中には

別の高校へ入り直した者、通信制高校・各種学校などに籍を置く者など、何らかの形で学校に関わりを持ち続けようとするケースは少なくないが、卒業にまで至ったケースは在籍中のものを除けば1例に過ぎない。

従ってほとんどの者は高校中退者として、社会に出ることになるわけだが、就労しているほぼ全員が仕事に対しては意欲的である。例えば、「中退したことはもったいないと思うが、仕事で成功すればいい」、「いまに大きいことをすれば中退なんて何でもない」などである。さらに、半数程度の者が高校卒業生や漠然とした世間への対抗的な意識について述べていることである。

もちろん、面接という設定が対象者に過剰に中退者であることを意識させてしまった可能性は否定できないが、中退者の挽回意識からくると思われるある種の“気負い”は特徴的に見られた。

3) 事故・事件

ここでは今までの話の展開から少し離れて、別の視点から中退者を見ていきたい。

中退者との面接を重ねていくにしたがって、彼らの多くが中退後（あるいは中退前）に様々な事故や事件に出会っていることが明らかになった。

特に目立つのは交通事故である。判明しただけで、中退者22名のうち少なくとも12名はバイクや自動車で事故を起こしていた。いずれも自ら運転していたもので、事故の原因はスピードの出し過ぎや、暴走族仲間と山道を暴走中の事故など、無理な運転による。そして、さらにこの12名のうち、5名は重大な事故である。人身事故が2名、他の3名は内蔵破裂、骨折などの重傷で入院している。

事例 No. 22

24歳、空調整備、校則違反を重ねて高校2年で中退

中退後、交通事故を起こして同級生を死なせてしまった。事故後、地元に行かれなくなって、一年間くらい〇市に行っていた。再び地元に戻ってきた時に仕事を見つけ、現在まで4年間そこで働いている。高校中退はまわりには迷惑をかけたかも知れないが、自分としてはたいしたことはなかった。そ

れよりも、事故を起こして〇市に行ったことのほうが大きい。しかし、それで強い人間になった。

いずれにしても、交通事故の多さは特記すべきことであり、一人で2回、3回と事故を重ねている者もいた。交通事故以外にも、仕事中にガソリンが引火して火傷を負った者、自動車工場で機械に腕を挟まれて骨折し、失職した者もあった。また、ちょうど中退した頃に父親を亡くした者が2名あった。そのうちの一人は元暴走族のリーダーであったというが、「自分が父親を殺したようなものだ」と語っていたのが印象的である。

中退という事実が、中退者にとって一つの転機であったことはまちがいなからうが、中退に連なって起きた出来事が彼らに及ぼした影響はさらに大きいようである。

4) 中退者と家族およびその他の重要な他者

1, 2回の面接からは、中退者の家庭環境について知り得たことには自ずと限りがあり、実際、特徴的なことは言えないとの印象である。もちろん、家庭内の事情が中退に関わっていたと推察される以下のような事例も見られた。

事例 No. 19

23歳、タイヤ卸売業、学業不振により高校2年で中退

中退した頃は家庭内でもめごとが多く、とても勉強できる感じではなかった。父親は家の中で暴力をふるったりして、両親の仲が悪く、離婚話も持ち上がっていた。一時別居という形で母親が借りたアパートは、高校の友人達の溜り場のようにになっていた。高2の時に、当時高3だった姉と2人でしばらく家出したが、家にもどってきても親は心配した様子もなかった。そのうち、姉が高校を中退し、自分もそれに影響されて中退した。

この事例のように、家庭内の事情が高校中退に大きく関わっていたと思われる具体的な状況を他の面接者から聞くことはなかった。だが、家族が中退という事態に示した様々な反応については、「親にはものも言えない感じだった」、

「勘当された」、「退学する時、担任と母親の3人の席で、母親が泣き出したので、専門学校に進路変更という形にするしかなかった」などと述べている。

家族が中退に対して否定的な感情を抱くのは当然であろうが、少なくとも面接できた者の家族（両親）は現時点においては、中退に対して受容的な態度を取っているようである。既に見たように、就職に当たっては家族の協力を得ている者が多い。また、「親は自分が立ち直ったと思っているし、今は応援してくれている」、「親は協力的だ」と述べる中退者もいた。しかし、面接できなかった44名にまで枠を広げると、今なお中退に対して否定的な感情を抱いている親がいることは事実である。中退者本人は面接を承諾したものの、親からの抗議により面接にいらなかったものが2例あったことから、それが窺われる。

さて、中退後の援助関係という視点から捉えれば、面接できた中退者でも見てきたように、家族がまず支えになったという中退者は少なくない。しかし、家族以外にも重要な他者によって支えられてきたという中退者もいる。例えば、職場の人間関係の中で、自分が信頼されうる存在であるという認識が中退者を支えることがしばしば見られる。「今の会社は自分を信頼してくれているので、期待を裏切りたくない」、「退学したのも承知の上で店を任せているので、信用されているのだと思う」などがその例である。

3. 面接した25名の卒業生について

H高校の卒業生25名についても、中退者との比較対象の意味で面接を行った。この25名のプロフィールは表4に示した。

1) 高校卒業後、現在に至るまでの経緯

面接した卒業生25名のうち（以下、単に卒業生と略す）のうち、高校卒業と同時に就職した者が15名、進学した者が10名である。進学者の内訳は4年制大学5名、専修学校5名である。

現在の状況は、仕事をしている者が19名、大学または専修学校在学中が5名、病気療養中が1名であった。仕事をしている者の具体的な職業は、自動車・オートバイ製造業4名、公務員3名、小売店店員3名などであった。

卒業生についても、中退者の場合と同様に、高校卒業後から現在に至るまで

表4 事例一覧(面接した卒業生25名)

No.	年齢	就労状況	高校卒業後の経緯
1	19	大学生	進学
2	19	運送会社事務	現在の職場に就職
3	19	病気療養中	病気により就職内定先を辞退
4	19	公務員(市役所)	現在の職場に就職
5	20	大学生	進学
6	20	公務員(市役所)	現在の職場に就職
7	20	専門学校生	進学
8	20	自動車部品設計	現在の職場に就職
9	20	自動車製造業	現在の職場に就職
10	21	専門学校生	進学
11	21	大学生	進学
12	21	デパート店員	現在の職場に就職
13	21	オートバイ製造業	現在の職場に就職
14	22	自動車部品設計	専門学校を経て、現在の職場に就職
15	22	スーパー店員	自営業手伝いを経て、現在の職場に就職
16	22	オートバイ製造業	現在の職場に就職
17	23	ガス会社	大学を経て、現在の職場に就職
18	23	自動車部品	現在の職場に就職
19	23	テクニカルイラストレーター	専門学校を経て、現在の職場に就職
20	23	電力会社	現在の職場に就職
21	23	会計事務所	別の事務所を経て、現在の職場に就職
22	23	団体職員	現在の職場に就職
23	24	公務員(郵便局)	現在の職場に就職
24	24	団体職員	大学を経て、現在の職場に就職
25	24	卸売業(靴)	大学を経て、現在の職場に就職

の経緯を尋ねた。その結果、高校あるいは大学・専修学校卒業後に就職し、一度も転職していない者が21名（ただし、大学・専修学校在学中の者も含む）と中退者に比較した場合、著しく定着がよいことがわかる。その他の4名についても、いわゆる職を転々としたというタイプではなかった。

2) 卒業時から現在に至るまでの心理的変遷

高校生だった頃と現在とを比較した時の、内面的あるいは社会に対する意識の変化については、「全然変わっていない」もしくは「基本的には変わっていないが、社会に出て以前より積極的になった」という者がほとんどであった。この点は、何らかの変化を述べていた中退者とは対照的である。

ところでH高校は商業高校であり、卒業後に就職するのが一般的であるが、卒業生全体の約3割は進学している。面接した卒業生のうち進学した者についてその動機を尋ねてみた。それによると、大学進学者の多くは「高校卒業後にすぐ就職するのは早過ぎるし、もう少し時間が欲しかった」ことを進学動機に挙げている。一方、専修学校への進学者は、「自分の興味のあることをもっとやってみたい」、「いい就職口が高卒では見つからない」といった、現実的な理由を述べている。以下は大学進学者の事例である。

事例 No. 17

23歳、ガス会社勤務

大学に進学したのは、（高校卒業後）いきなり就職するよりワンクッション置きたかったから。高2の頃は就職か進学かで迷ったが、高3になって進学希望になった。そのまま社会に出るのは抵抗があったし、自信もなかった。大学では無限に時間があるような気がしていた。高校の頃に比べていくらか気が大きくなった。

この事例にみられるように、進学することによって時間的余裕を獲得した卒業生たちは社会との直面を一時回避しているという感覚が強い。

さて、高校卒業後そのまま就職した者、そして大学・専修学校を卒業後に就職した者の社会、特に仕事に対する意識であるが、職場の不満を述べる者も見

られたが全般的に仕事への適応状態はよいという印象を得た。また、中退者が抱いていたような仕事に対する気負いもほとんどなく、将来の見通しについては「わからない」、「何とも言えない」と述べている者が目立った。

3) 高校生活および中退者への意識

中退者の場合と同様に、卒業生の家庭環境についての情報は乏しいので、家庭以外での重要な人間関係の場である高校での生活ぶりについて述べたい。

最初は高校生活の始まり、つまりH高校への入学動機について触れておく。中退者のH高校への入学動機についてはこれまで述べてこなかったが、中退者22名のうちの大半は、「自分の学力を考慮して」(7名)、「他に行きたい高校があったが、中学のときの進路指導で」(10名)という消極的なものである。このような発言には、当然現在の意識が反映していると考えられるが、卒業生にしても中退者と同様にほとんどが消極的な理由で入学しているのである。

結局、卒業生と中退者とでは入学動機にさほど違いは認められないが、入学後の高校生活の送り方で大きく異なっていると考えられる。当然ではあるが、卒業生は平凡で日常的な高校生活の中に何らかの支えや楽しみを見いだしていた。また、彼らの日常生活は高校を中心に回っていたともいえる。もっとも、面接した者の中にはバイクの無免許運転が発覚して、停学処分を経験した者もあった。本人によれば退学寸前であったというが、卒業後は順調に就職して現在に至っている。

一方、中退者の高校生活は、中退するかなり前から学校から遠ざかり、高校生活以外に活動の場を見いだしていることが多い。例えば、深夜までアルバイトに励み、いつの間にかアルバイトが主で高校が従になってしまった者、暴走族に参入する者、「ネオンを求めて遊ぶという感じだった」者などが挙げられる。そのため、ほとんどの中退者は高校をやめる時点では、高校生活からは脱落した状態となっているのである。

それでは高校在学中に、同級生たちは中退していく者をどの様に見ていたのであろうか。卒業生たちの話によれば、高校の時に中退者(この時点ではまだ中退していなかったわけだが)とよく話をしていたという者は少なく、「自分とは別の世界の人間だ」、「いつの間にかいなくなってしまった」などと述べて

いる。概して中退者に対しては無関心あるいは批判的であったというところに卒業生の意識は集約される。中退者側からすれば、学校内では孤立無援状態に近かったのではないかと思われる。

IV. 考察

1. 中退者をめぐる社会の状況

わが国の高校進学率が優に9割を越える状況のもとでは、高校での学習にも十分な意義を見いだせず、中学での進路指導の結果として進学した高校に帰属意識も持てない“潜在的退学指向性”を持っている生徒は少なくなかろう。それから考えると、全国の中退者数の在籍者数との比率が高々2%程度で推移している現状は、決して悲観すべき状況ではないのかもしれない⁵⁾。

だがここで問題にしたいのは数量的なことではなく、中退者と卒業生との間に生じるいわばライフスタイルの差である。普通に高校を卒業する場合は、その代償として学校社会から実社会（あるいは別の学校社会）へはスムーズに移行することになっている。しかし、理由はどうあれ高校という社会から途中で離れてしまった場合には、身の振り方の選択肢があまりに少なく、結果として困難に直面することになる。アメリカの文化人類学者Rholenは日本の高校生について、「大人によってきびしく監視され、まわりの環境条件によって制約されている。仲間同志で影響し合う時間、自分たちだけの世界を創造する時間、そして大人の世界を探索する時間は、ごく限られている」⁶⁾と述べ、日本の学校社会の閉鎖的な側面を批判的に捉えている。この学校社会の閉鎖性は、10代後半の世代にとって高校が心理的・社会的にほとんど唯一の居場所である⁷⁾ということによってさらに強化されている。それは、これまで学校場面以外での生活を貧困にしてきた我々の社会の責任でもある。

確かに近年では、高校中退者の様々なバイパス径路がかってより増えてきてはいる。しかし、バイパスといわれるものの多くは、“傷ついた者”を癒し、最終的には学校社会へ再統合されていくことの手助けを目的としているところが多いように思われる。しかも、H高校の中退者の中に見られるような学校社

会に復帰する意志のない者は、その恩恵を受けることもほとんどない。

したがって、中退者の受け皿が増加することは望ましいことではあるが、単に学校社会の中のバイパスといったものではなく、例えば実社会への準備的段階として職業オリエンテーションを公的機関が担うといったものも必要である。中退者の中には闇雲に職を転々とする者があり、中退直後の時期に援助を必要としている。実際、この中退者への就職の斡旋については既に一部で試みられており⁸⁾、今後の活動が注目されるところである。

2. 中退者の生活再建

高校中退者の問題を社会状況の枠の中でのみ捉えることは片手落ちであり、中退者の個人レベルでの適応の問題に立ち入る必要がある。

中退後の社会への適応を考えると、何が中退者にとって適応かという問題は議論の分かれるところであろう。少なくとも就労・就学という点からみれば、全対象者66名のうち53名は定職をもち、3名は就学中であり、現時点で8割以上はおおむね安定した社会生活を送っていると推察される。さらに、面接可能であった22名については、彼らが中退という事実を受け入れる状態になっているからこそ面接に応じたと考えることができるかも知れない。

しかし、高校中退直前においては衝動性や緊張感について中退者自身が語っているように、一種の危機状態にあったことは認められる。そして高校を中退し、一旦学校社会から離れた者にとっては、再びそこに戻ることは容易ではなく、中退のハンディを乗り越えるには、「仕事で成功する」ことだと考えるのは不思議ではない。今回、面接に応じた中退者のほとんどはこのタイプであり、前向きの姿勢と評価できる面もあろう。

北村⁹⁾は女子高校中退者との面接を通して、社会生活適応への順調さや明るさとくったくのなさを印象として述べ、高校中退が中退後の有利な就職や結婚によって清算できるという感覚を中退者が抱いていると感じたという。本調査では男子に限られているが、この2つの結果の間にはいくつかの共通点が見られる。すなわち社会生活適応を就業状況で見たときに、大半の中退者が安定した生活状況にあり、高校中退を「仕事で成功する（女子の場合は結婚も含まれる）」ことによって挽回するという意識をもっている点である。

だが、少なくとも本調査に限っていえば、多くの中退者が安定した仕事を続けているという点から、直ちに「社会生活適応の順調さ」と受け取ることは難しい。むしろ学校社会から離れてしまった中退者の多くは、突如として実社会に投げ込まれて、過剰適応をせざるを得なかったのではなかろうか。したがって、中退後の生活再建が「仕事上での成功」である限り、仕事への気負いや卒業生への対抗意識が現れ、中退者にある種の余裕のなさが生じるとも考えられよう。それは、中退者としてのアイデンティティにとりつかれ、非中退者への排他性をも有しかねないのである¹⁰⁾。

一方、卒業生が高校生だった頃と比べて、「変わっていない」と述べる背景には、就職するにせよ進学するにせよ、常に同級生と共にあって自分自身では気がつかないような“ゆるやかな成長”を遂げていったということではなかろうか。

青年期の自己確立の問題を考えれば、何か意義ある仕事を決定することは今日ますます困難になっている¹¹⁾。高校中退者の中退後の進路が限られている現実の中で、職業的な安定を獲得することは容易ではないはずである。もちろん中退者の中には、やりがいのある仕事を見つけて高校を去っていた者もいる。だが、大半は心理的にも社会的にも早期に自分の進路について決着を付けざるを得なかった一群と思われる。高校中退によって失われたものは、高卒という学歴以上に自己確立をする時間的余裕ではなかったのだろうか。

V. まとめ

昭和52年から57年にかけてある公立の商業高校に入学し、中退した66名について、中退後の状況を卒業生と比較しながら検討した。職を転々とするなど不安定な生活を経てきた中退者もあるが、現在は継続的に就労・就学している者が8割を越え、おおむね安定した社会生活を送っていると考えられる。

さらに、面接できた中退者22名については、その多くが中退時には衝動性・緊張感があったが、現在は心理的に安定し、周囲の援助も受けながら仕事への意欲が窺われた。しかし同時に、“中退者意識”からくるとと思われる仕事への

気負いや余裕のなさも感じられた。これは早期に職業選択を軸にした自己確立を迫られた結果ではないかと考えられる。

[本論は拙著：高校生のライフスタイル～退学後の「生活再建」過程とその意識～，学校保健研究，33（12），588－594，1991，をもとに加筆・一部改変したものである。]

文献

- 1) 朝日新聞, 1991. 2. 8
- 2) 高原正興: 学歴社会と無職少年, 犯罪と非行, No. 86, 58-73, 1990
- 3) 内外教育, 1983. 2. 4
- 4) 内外教育, 1985. 4. 5
- 5) 金子照基: 高校生の中退を考える, 教育と医学, 10月号, 24-30, 1991
- 6) Rholen, T.P.: Japan's High School, 1983 (友田泰正訳: 日本の高校, 320, サイマル出版会, 東京, 1988)
- 7) 富田富士也: 「高校中退・中学浪人」を生きる若者たち, 世界, 第554号, 264-271, 1991
- 8) 秋山和雄: 高校中退者等の不就労青少年への就労援助について, 日本社会福祉学会第39回全国大会報告要旨集, 97-98, 1991
- 9) 北村陽英: 中学生の精神保健, 213-225, 日本評論社, 東京, 1991
- 10) 西平直喜: 成人になること—生育史心理学から, 158-161, 東京大学出版会, 東京, 1990
- 11) 村瀬孝雄: 現代学生における自己確立の諸相, 笠原・山田編, キャンパスの症状群, 3-31, 弘文堂, 東京, 1981